先進事例紹介

消防団にＩＰ無線機を配備

大分県　中津市消防本部

1　管内の概要

中津市は、大分県の西北端に位置し、東は宇佐市、南西は玖珠郡、日田市、北西は福岡県に接し、北東は周防灘に面しています。北九州市へは52㎞の距離にあり、古くから交通の要衝として繁栄してきたまちです。主要な交通機関としては、市内を東西に走っているＪＲ日豊本線があり、中津駅、東中津駅、今津駅が存在しています。道路は、国道10号、213号、496号、500号及び県道中津高田線が東西方向の骨格として、市域を横断しています。また、国道212号が南北方向の骨格を形成しています。さらに、平成26年度末の開通をめざし、市を東西に走る東九州自動車道と南北に走る中津日田高規格道路の建設が進められています。

中津市は、平成17年３月に中津市と下毛郡３町１村が合併し、面積は491.17㎢、人口は85,500人（平成26年６月15日現在）で、市域の約80％を山林原野が占め、山国川下流の平野部にまとまった農地が開け、中津地域を中核としています。北部は狭く南部は西方に大きく張り出した形状を示し、西側に英彦山がそびえ、地域を貫流する山国川の分水嶺となっています。

現在、平成26年の大河ドラマで中津城の初代城主である黒田官兵衛孝高を主人公とする「軍師官兵衛」が放映されており観光客も急増しております。また、中津市は福沢諭吉が幼少期を過ごしたまちでもあり、現在もその住まいであった旧邸が残されています。さらに、最近では「からあげの聖地」として、中津市の名が広まりつつあります。また、旧下毛地域は、耶馬日田英彦山国定公園の中にあり自然に恵まれ、特に秋の紅葉シーズンには、深耶馬溪地区の一目八景をはじめ、本耶馬溪地区の青の同門･競秀峰など、紅葉の名所を中心に、市域の山々が色鮮やかに着飾ります。他方、工業面では、平成16にダイハツ車体株式会社（平成18年にダイハツ九州株式会社に商号変更）が本社を中津市に移転し生産を開始しました。現在では年間約43万台の生産を誇り、関連企業の進出も相次いでいます。

中津市消防本部は、昭和27年４月に職員18人の消防本部として発足し、現在では１本部１署１分署、定数120人で消防・救急・救助業務を行っており、平成26年度末開通予定の東九州自動車道の開通に合わせて高速道路での事故などの対応や旧市内東部地域などの消防救急体制の充実を図るため､新たに東部出張所を建設中です。

中津市消防団は、平成17年３月の１市３町１村の合併により方面団制を導入し、現在は５方面団、73分団、

出初式

1,326人（定数1,481人）で地域の安全・安心を確保するため、地域の防災の要として活動しています。また、平成26年４月１日から機能別消防団員制度を導入し、現員1,326人の内128人が機能別消防団員として活動しています。

2　ＩＰ無線機導入の経緯

３.11東日本大震災では、不幸にも多くの消防団員が津波の被害に遭って殉職しました。あらためてご冥福をお祈りいたします。このことを受け、平成24年８月、消防庁国民保護・防災部防災課が、東日本大震災を踏まえた大規模災害時における消防団活動のあり方等に関する検討会の報告書で、「国、都道府県及び市町村は、津波警報等の情報を確実に消防団員に伝達するための情報伝達体制の整備・確立を行う必要がある。その際、情報伝達手段の多重化・双方向化を図る必要がある。」と提言をしました。

中津市では、平成24年７月の九州北部豪雨で２度に亘って山国川が氾濫し、これまで経験したことのない大きな被害を受けました。この時、消防団員は、混乱する現場において警戒や住民の避難誘導、災害現場での活動にあたりましたが、消防団員と各支所あるいは消防本部との通信手段が十分でなく、消防団員個人の携帯電話に頼らざるを得ないという状況でした。そのため、現場の状況把握などに時間がかかり、消防団員との通信手段の確保の必要性を痛感したところです。そうした中、総務省は、平成26年２月７日付けで「消防団の装備の基準」の見直しを行い、消防団に「双方向の情報伝達が可能な情報通信機器の充実」ということが盛り込まれました。中津市消防本部では、九州北部豪雨の経験を踏まえ、国の見直し以前から双方向の通信が可能な無線機の導入を検討してきました。

3　ＩＰ無線選定の理由

今回導入したＩＰ無線機は、ドコモの携帯電話のパケット通信帯域を利用して通話ができるため、ドコモのエリアであれば全国どこでも通じることや、車載用にはＧＰＳ機能を備えており、現場で活動する団員の位置確認ができ、本部からの指揮が取りやすいなどのメリットがあります。その上なんと言っても、独自の設備を整備するには膨大な事業費や年間の維持費が掛かりますが、その必要がありません。さらに、免許取得の必要がなく、このＩＰ無線機は、端末機を購入するだけで利用でき、維持費についても、１回線当たりの通信料のみで、年間の保守料が掛からないというのが、最大の理由です。

ＩＰ無線機を使う隠田義明団長

4　終わりに

消防団員は、本業を持ちながらも「自らの地域は自ら守る」という郷土愛の精神に基づき、地域住民の安全・安心の確保のため、昼夜を問わず果敢に活動しています。地域住民の生命・財産を守るためには、消防団員自らの安全を確保しなければなりません。今回の中津市消防団へのＩＰ無線機の配備により、消防団員の現場活動における安全が確保されることを期待しています。

車載用ＩＰ無線機を使う団員